



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

ミュンヘン日本人国際学校における体育科実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 星,卓志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173739

ミュンヘン日本人国際学校における体育科実践

前ミュンヘン日本人国際学校 教諭

北海道北広島市立広葉中学校 教諭 星 卓 志

キーワード：在外教育施設、保健体育科教育、人材活用、スポーツ交流、カリキュラムマネジメント

1. はじめに

2016年4月に赴任してから2019年3月までの3年間、ドイツのミュンヘンで生活し貴重な経験をすることができた。在外ならではのものも含め、特徴的な教育活動の概略を紹介する。

2. 体育活動実践報告

(1) グラウンドを借用しての授業

1994年4月にマリエンプラッツ近くに開校した学校は、2003年にU5（地下鉄5番線）ブルダミュール駅近くの新校舎に移った。移転先は様々な条件を鑑み、市から提供された現在の場所になったが、グラウンドがないというのが大きな課題である。

通常の体育授業は、歩いて10分ほどのところにあるスポーツ施設のグラウンドを借用しており、火曜日の5・6時間目を小学部、木曜日の5・6時間目を中学部が徒歩で移動して授業している。授業道具はワンボックスカーにのせて持ち込み、緊急時の車両としても使用している。グラウンドは芝のサッカー場一面と人工芝のサッカー場一面を利用し、単元や学年の成長段階に合わせて場所を変えて使用している。

授業は担任が指導にあたることが多いが、教科担任制が基本なので体育科が担当する小学部の学年もある。中学部は、体育館の授業では学年ごとになるが、グラウンド体育では3学年合同となり、週3時間のうち2時間が合同となるため自然と学年間の交流がすすめられる。

授業内容は、日本の学習指導要領に準拠しており、ハードルなどもすべて持ち込んで学んでいる。全面芝のサッカー場で走り回ったり、サッカーでスライディングをしたりすることができる授業は、とても爽快で心地よく、日本の義務教育学校では経験できない環境であると、しみじみ思いながら授業をしていた。

小学校4年生以下は1人で外出ができない状況であったため、体力不足が大きな課題となっている本校の児童生徒にとって、グラウンド授業は貴重な時間となっており、各学年とも運動量の確保を意識した授業を行った。

年に1度、小学部ではこの競技場内を利用して長距離走大会を行い、発達段階に応じた距離を競わせて体力作りに努めた。保護者もこぞって応援に来るので非常に盛り上がった企画となった。

運動会は5月末から6月中旬までの土曜日に開催されるが、会場は学校から地下鉄を利用して45分くらいかかる場所を借用している。ドイツでは、土日のグラウンドはサッカーのクラブチームが練習や試合に使うので、普段使っている施設を使うことができず、ミュンヘン北部にあるグラウンドが毎年この時期だけは日本人学校に空けてくれるので利用させていただいている。運動会の内容は日本の学校と遜色ない形で行われるが、事前準備や練習がほとんどできない状況で、ぶっつけ本番ながら毎年立派な運動会を成功させる児童生徒には感心させられた。

(2) 体育館を利用しての授業

体育館は、地下に卓球場と併設されており、正規のバスケットコートが1面とれる程度の大きさである。器具や教具は非常に充実しているが、ドイツのものなのでそれぞれの使い方を探り当てるまでは苦労した。バレーボールの支柱は日本と形状が全く異なり、引っかけてくるくる回せばよいというものではなく、3年目にしてようやく正しいと思われるやり方を発見した。跳び箱は、ドイツ式のものとは日本の中学生が使う規格に比べて非常

に長く、台形ではなく四角柱のものである。マットは日本の形状ではなく、畳のような板状のものを利用して、鉄棒は体育館に設置して使用するため、全校鉄棒期間を冬にもうけて設置したままの期間を作って実施した。器具の使い方を理解さえすれば、バドミントン、バレーボール、ハンドボール、バスケットボールのラインが常設されており、道具もすべてそろっている。卓球場には卓球台3台が常設され、その他にも3台使用できるものがある。体力テストの器具もそろっており、日本の学校のように報告義務はないが、毎年必ず全校児童生徒の体力測定を実施していた。筋力と持久力が課題となっており、準備運動に関連した運動を取り入れた。体育館は日本と同様に講堂としてさまざまに利用されるが、ステージがないので行事の際には特設のステージが設置された。

(3) 水泳授業 人材活用①

バイエルン州では、水泳授業をする際は指導免許が必要となり、毎年ミュンヘン日本人国際学校に着任した先生方全員がこの免許を取るようになってきている。しかし、この実技講習内容が非常に厳しく、試験に合格せず再試験を繰り返すことも珍しくない。ミュンヘン日本人国際学校に赴任した教師にとっては、赴任早々に大きな試練がやってくる。

我々が取得する水泳指導員C級は、基本となるクロール、平泳ぎ、背泳ぎ100mをはじめ、15m潜行、3.5m潜水、着衣泳200m、救助者をけん引しての50m、救助者を押して50mなどを規定時間内に泳ぎ、さらに3種類の飛び込み、救助者がパニックになって抱きついてきた時に潜って背後に回り込んでの背泳救助などを練習し、実技試験を行う。また、座学講習が8時間あり、ドイツ語での救急救命の仕方、ドイツの地形を理解しての水難事故防止などを学び、筆記試験を受ける。実技試験、筆記試験の両方を合格して水泳指導が可能となる。

指導員資格を得た後、SWMという電力会社が運営している半公営プールを利用して全学年8時間の水泳学習が始まる。小中一貫という特色を生かし、低学年を上級生がサポートする体制を組み、小学1年生と中学部、小学2年生と小学6年生が一緒に同行して着替えやシャワーの手伝いをした。低学年は1m程度の子供用プール、高学年や中学部は深さ3.6mある25mプールでの授業を行う。中学部は、広めの1レーンのみの使用となっており、レベルが異なる40名弱の生徒の授業となるため手狭となり、全体の運動量を確保するため片道泳いで歩いて戻るなど授業の流し方に苦慮した。

水泳指導では、必ず複数体制で指導員配置が必要とされているバイエルン州のルールがあったため、指導員が不足する場合は、現地の指導員を確保して本校指導者と協力して学習を進めた。

(4) ダンス 人材活用②

ダンスの授業では、運動会の発表演技と北海道の紹介もかねてよさこいソーラン節に挑戦した。生徒同士で学び合う授業展開から、リーダーが中心となって全体を鼓舞し、声を出して中学部がまとまっていく様子が目の当たりにできる授業であった。運動会の発表が大変好評であったため、夏休み直前に行われるヤープンフェスト（ミュンヘン日本祭り）での発表や、1月に行われているミュンヘン独日協会新年会の舞台発表など、ミュンヘンの日本人会を盛り上げる一翼を担うことができた。



ヤープンフェストでの発表風景

外部指導者の人材活用としては、宮崎県からコンテンポラリーダンス集団「んまつーボス」がルーアニア講演などを行った後、ミュンヘンに立ち寄って2日間にわたってワークショップを引き受けてくれた。小学部低学年、

小学部中学年、小学部高学年、中学部の4グループを各2時間続きで授業をしていただいたが、発達段階に応じて体を動かし、その中で知らず知らず引きこまれて最終的には自分の表現力が引き出される様はプロの仕事として感心させられた。

(5) 合気道 人材活用③

ミュンヘン日本人国際学校のハウスマイスター(日本でいう業務主事)が、合気道の有段者であったことから、私が赴任する前2年間に赴任した初年度の3年間は、武道の学習を合気道で行った。さらに私が赴任した年には、合気道天道流管長の清水健二氏と同道場長の清水健太氏が日本からドイツに普及・指導で来られた際、ミュンヘン日本人国際学校に立ち寄っていただいて講演と演武をしていただいた。合気道の奥深さを聞かせていただいたとともに、実際に演武を見せていただき、児童生徒は合気道の迫力や魅力に引き込まれた。合気道は中学部の授業で8時間行った。ポーランド系ドイツ人のハウスマイスターが指導者となったが、日本語がほとんどできなかったため同校事務局のもの1名に必ず通訳として参加していただいた。相手の力を利用した関節技などだけでなく、日本で重視されている礼儀・作法をドイツ人が丁寧に指導している姿はとても印象的であった。子どもたちにとっては非常によい経験となったのは確かだが、ハウスマイスターや事務局の本務を優先するために、赴任2年目からは私自身が指導者となって柔道の授業に切り替えた。畳は100枚ほど保有していたため、柔道着を中学部生徒数分準備して行った。基本から審判法まで広く学んだが、畳の上で柔道着を着た日本の子どもたちがミュンヘンで学ぶ姿は新鮮であるとともに、日本人として大切にすべき礼儀・作法を改めて学ぶよい機会となった。

(6) スケート授業

冬季スポーツが盛んなミュンヘンの地域性を生かし、北海道出身の私が指導可能であったためスケートの授業を取り入れた。中学部のみではあったが、地下鉄で30分移動したスケート場を利用した。全国から集まった生徒の中には、スケート経験が全くない生徒が多かった。スケート場に行く前の事前学習を深め、スケート靴はスケート場でレンタルし、グループをレベル別に3段階に分けて技術指導をした。少ない授業の中であったが、全員が滑走可能となり、最終的にはリレーをして競技を楽しむレベルにまで到達した。生徒には非常に好評で、楽しみながら学びを深められる授業であった。

(7) サッカーワールドカップ

2018年6月、サッカー男子日本代表選手団がオーストリア・ゼーフェルトを会場にワールドカップ直前合宿をした際、日本人学校の児童生徒との交流の機会を作りたいという話をいただいた。日曜日の開催であったことと、ドイツ国外であったため、保護者送迎の自由参加で呼びかけたところ、児童生徒だけで100名ほどの参加者が集まり、保護者と合わせて300名ほどが集まった。グラウンドで子どもたちが整列して待っているところに、選手団が入場した。本田選手、香川選手、長谷部選手、長友選手…。子どもたちは一気にテンションが高まり、記念撮影や握手、記念撮影などの交流をしていただいた。「日本の学校ではありえません」とサッカー協会の方が話していたが、普段日本に接する機会が少なかったり、生まれてからまだ日本に1度も住んだことがない子どもたちがいたりする中で、まさに有難いひと時であった。交流会後には、練習風景とミニゲームの様子を見せていただき、子どもたちのサッカー熱が高まった。

ワールドカップ本戦の1週間前、オーストリアのインスブルックで行われた日本対パラグアイ戦には、中学部全員をサッカーの授業の一環として観戦に引率した。ワールドカップ直前にもかかわらず、日本ではあまり盛り上がっていないということに加え、オーストリアの田舎町での試合とあって観客が入らないのではないかと不安視されたようだが、ミュンヘン日本人国際学校の中学部と職員50名と保護者等約50名、総勢100名ほどの応援団が駆けつけた。ほとんどの生徒が日本代表のレプリカユニフォームを着て応援する熱の入れようで、全員で青

い大きなゴミ袋を準備し、膨らませて客席をサムライブルーに埋めて応援した。交流していただいた選手が目の前でプレーする姿を見て、子どもたちはサッカーに対する理解を深めるとともに、5対3で勝利したこともあって選手の皆さんから夢を受け取ることができた。



サッカー男子日本代表チームとの交流会

(8) ハンドボールワールドカップ

2019年1月、世界選手権デンマーク・ドイツ大会のミュンヘン会場の試合にハンドボール男子日本代表チームが出場することになり、ドイツハンドボール協会から観戦の招待を受け、ハンドボール授業の一環として観戦させていただいた。ドイツでは歴史ある大変メジャーなスポーツで人気が高いが、日本ではさほど知られていないため事前学習を深めて参加した。

ミュンヘンオリンピックアリーナで行われた日本対アイスランド戦。手に汗握る接戦の末の敗戦となったが、生徒は大きな声援を送って盛り上がった。貴重な試合を観戦する機会を得て、後日、本校中学部では、運動不足解消のために行っている登校後から1時間目までの間の朝運動がハンドボールになった。

蛇足だが、試合翌日、日本選手の保護者の方々がミュンヘン日本人国際学校を訪問し、応援に対する謝意を伝えに来てくださった。スポーツを通じて、いろいろな交流が生まれることを実感した。

(9) 保健学習

ミュンヘンでは、飲酒可能な年齢は16歳であり、保護者の監督下であれば14歳からビールなどアルコール分の低い飲酒が可能である。また、喫煙は18歳から認められている。高校生になってから初めて日本で暮らす生徒がいるため、お酒とたばこは20歳からという日本の法律をしっかりと教育する必要がある。救急車を呼ぶ場合、ドイツでは112番に電話するが、日本では119番であることを学ばなくてはならない。日本では必ず体験するであろう地震が、ドイツでは全く起こらないため、中学2年生の保健授業で日本の自然災害を丁寧に学ぶとともに、日本に戻った時のために地震による避難訓練も行っていた。

3. 結びに

ミュンヘンでは、充実した教科教育を進めることができた。人材活用という点においては、体育のみならず、キャリア教育でミュンヘンに暮らす日本人の芸術家、研究者、日本企業、日本人会などにお世話になり、数多くの外部講師による授業を実施することができた。ミュンヘン日本人国際学校を通じて、多くの人や団体とつながることができ、出会いとご縁をもとに日本では決して経験できない貴重なお話を聞く機会に恵まれた。よい事ばかりでないのは言うまでもないが、すべてをポジティブに受け止めることで、個人的にはかけがえのない3年間となった。地域や子どもの実情に応じた教育課程の編成せざるを得ない在外施設においては、カリキュラムマネジメントは日常的に行われている。